

映像研究の方法

『社会階級』

女は所有されるモノ、男は所有する者として描かれている。女は若い男にも、ヤクザにも、中年のサラリーマンにいたるまで、年齢問わずあらゆる男に所有されるモノである。それはヒロインのまこと及び、その親友の女、そして客引きをしていた女(ヤクザの女)、そしておかみさんを見れば、よくわかるだろう。一方で、劇中には男が露骨に所有、使用されるシーンはない。男と女の社会的地位の違いは、両者の扱われ方の違いを見れば明らかである。

この映画には、ジェンダーの違いによる社会的地位の差が表れている。つまり男は所有する上の立場、女は所有される下の立場である。例として、①まこと、②親友の女、③ヤクザの女、④おかみさんの4人を挙げ、その社会的地位の格差を明らかにする。

・若い女：ヒロイン、まこ

① のまことは、主人公の男に所有されていたと言える。映画の最後の方で、ヤクザが主人公に、「金の代わりにお前の女をよこせ。」と持ちかけたシーンを思い出してもらいたい。これはまさに、まことが男のモノであることを示している。もし、ヤクザたちに所有の概念がなかったとしたら、わざわざ主人公にお伺いを立てる必要はないのである。

また、彼女は彼の金儲けの手段として使われていた。性欲にまみれた中年の男をたぶらかし金をふんだくるという恐喝まがいの金儲けは、常に女の方に大きな危険が伴う。まるでヤクザの商売のようなではないか。それを仮にも彼女にやらせようとする男の心境は愛情だろうか？彼の中の大半を所有欲が占めていたとしたら、簡単に説明がつく。彼は金ほしさに、所有する女を手段として用いたのである。まことは皮肉にも、“社会で使われるような存在にはなりたくない”と言う男に所有され、使用されていたのである。

性欲のはけ口として扱われていたことも重要である。中には、彼女は好きで彼に抱かれていたという主張もあるかもしれないが、それは違う。墮胎後、海辺に置いて、まことが「できなくてごめんね。」と言っていることからわかるように、二人の関係にはSEXがつきものだからである。男がイライラしたとき、無理に抱かれてしまったこともある。その後の同意での行為も、まことは愛ゆえに行っていたことかもしれないけれども、それが結果的に性欲のはけ口として所有されることとなってしまったのである。

次に②のまことの親友の女もまた、主人公の友人によって金づるとして扱われていた。彼女は彼の学費を工面することで学生生活を支えていた。男の方は、結婚を真剣に考える風であったが、果たしてあの2人がどうなったかは劇中には描かれていない。まことと主人公のカップルが、死という結末を迎えた一方で、この2人がどうなったのかは気になるところであるが、とにかく劇中では、まことよりもはしばしでしつかりした面をのぞかせていた彼女でさえ、若い男に所有されてしまったのである。

3人目、③客引きをしていた女(のちにヤクザの女と判明した人)は言うまでもなく、ヤク

ザの男に所有されていた。ヤクザが座敷に入って来たシーン、ヤクザは“おれの女”というワードを用いて主人公を威嚇し、さらに女の髪を鷲づかんで階段の上から放り投げた。注目してほしいのは、このときの女のほうの行動・言動である。彼女は、なにもしなかった。抵抗すらろくすっぽせぬまま、されるがままに投げ捨てられたのである。これは、女のヤクザへの従属を示している。

最後の1人、④主人公と関係を持っていたおかみさんもまた、主人公によって所有されている。というよりも、お金を使って主人公に所有してもらっている、という方が正しいかもしれない。彼女は、お金の力を使って彼を引きとめておこうと必死なのであり、これもまた、所有の1つの形であると考ええる。

このように、劇中は男と女の所有、被所有に満ち溢れている。女性が学校へ行き、男性と同じように教養を身につけ、社会に出ていたであろう劇中の時代においても、ジェンダーの違いにおける社会的地位の差は大きいものだったのである。しかし、このように女性は男性に依存し、所有されるべきではない。1人の人間として動き、考え、社会でのあり方を見つめていく必要があるだろう。